一八世紀のスペイン＝アメリカ貿易とフランス

服部春彦

【要約】一七世紀後半にヨーロッパ列強のうちフランスが、スペイン本国からそのアメリカ植民地へ輸出される工業製品の最も大きな部分を供給していたことは、確実と思われるが、このスペイン＝アメリカ貿易に占めるフランスの地位は一八世紀の間にどのように変化したであろうか。筆者は一八世紀のフランス＝スペイン本国間の貿易の動きを同時期のスペイン本国＝アメリカ間貿易の動きと比較対照した結果、つぎの事実を確認することができた。すなわち、スペインのアメリカ向け輸出は一七一〇年代から九〇年代初めまで基本的趨勢として拡大をつづけたこと、これに対してフランスのスペイン本国向け輸出は、一七五〇年代半ばまではスペインのアメリカ向け輸出とほぼ並行して拡大しているが、六〇年代以降明確に伸び悩みあるいは収縮を示し、とくに七〇年代末～八〇年代にはアメリカ向け輸出の主体をなす繊維製品、わけても麻織物の輸出が激減をみたこと、である。これらの事実から、フランスは五〇年代半ばまではスペイン＝アメリカ貿易において支配的地位を占めつづけていたが、六〇年代以降、とりわけ七〇年代末～八〇年代にはその比重を大きく低下させるにいたった、と考えることができよう。

史林　六三巻二号　一九八〇年三月

はじめに

コロンブスによるアメリカ発見ののちスペインが中南米に建設した広大な植民地は、一六―一八世紀をつうじて、たんに母国スペインにとってのみならず他のヨーロッパ列強にとってもきわめて重要な経済的意義を担うことになった。スペイン政府はこの間一貫して植民地貿易の利益を自国の手に独占しようと図ったにもかかわらず、スペイン本国の工業生産の立ち遅れのゆえに植民地の急増する需要をまかなうためには外国工業製品の輸入に頼らざるをえず、その見返りとして

植民地産の金銀がスペインからヨーロッパ諸国へと大量に流出するにいたったからである。このようにスペインのアメリカ植民地が急速にヨーロッパ列強のための工業製品輸出市場にして金銀の供給基地と化していったことは、すでに周知のところであるが、[1]それではスペインを除く当時のヨーロッパ列強のうちスペイン領アメリカとの貿易から最大の利益を引き出したのはどの国であったか。

一六―一八世紀のスペイン＝アメリカ貿易の発展過程については、これまでC・H・ヘアリング、A・ジラール、E・J・ハミルトン、ショーニュ夫妻ら[2]によって、また最近ではスペインの経済史家A・ガルシア＝バケェロ・ゴンサレス[3]によって様々な角度から詳細な研究が行われてきているが、しかし右の問題については史料的制約もあって必ずしも十分に検討されてこなかったように思われる。この点について今日のフランスの学界ではつぎのような見方が広く受け入れられている。[4]すなわち、スペイン領アメリカにおいて最も大量に消費された工業製品は麻織物であり、ヨーロッパにおける麻織物の最大の生産国であったフランスが一七、八世紀を通してスペイン領アメリカに対する輸出商品の最大の供給者であった、と。これに対して従来わが国で一般に受け入れられてきた見方は、アメリカ向け輸出品としては麻織物よりも毛織物の方がはるかに重要とみなし、この毛織物の最大の輸出国であったイギリスが一六世紀中葉以降、とりわけ一七、八世紀においてアメリカ市場に対する工業製品の最大の供給者となり、そのことをつうじてアメリカ産貴金属の最大部分を掌中に収めたとみるものである。[5]これらのうちわが国での通説的見解は、実証的根拠が薄弱であってとうてい支持しがたいように筆者には思われるが、しかしフランスでの通説的見解の方にもなお立ち入って検討すべき余地が残されているといわなければならない。以下その点を具体的に述べることによって、本稿の課題を明確にすることにしたい。

まずスペイン領アメリカ貿易におけるフランスの優越的地位を統計的に証明している史料は、管見の限り一七世紀末のつぎの二つの史料のみである。その一つはつとにジラールによって分析されたスペイン派遣フランス特使パトゥーレの一六八六年付のメモワール[6]であり、いま一つはH・セーによって紹介された一六九一年付の匿名のメモワール[7]である。この

うち前者のメモワールについては後段で再び取り上げるが、ともかくこれらの史料によって、フランスが一七世紀末にスペイン本国を通じてのアメリカ植民地向け商品輸出額においてイギリス、オランダ等をはるかに引き離して断然首位を占めていたこと、またスペインへもたらされるアメリカからの帰り荷のうちフランスが最も大きな部分を獲得していたこと[8]、が確認されるのである。

このように、スペイン領アメリカとの貿易に占めるフランスの優位が明確に確認されるのは、研究の現段階にあっては一七世紀末の時点についてのみであり、かつそれはスペイン本国を経由するスペイン領アメリカ貿易に限ってである。一七世紀末以外の時期において、あるいはスペイン本国を経由しないヨーロッパ諸国とスペイン領アメリカとの間の直接貿易[9]をも考慮に入れた場合に、事情がどのようであったかについては、われわれは残念ながら明確にできないのである。けれども、前述の二つの史料および一八世紀のフランス＝スペイン貿易にかんする同時代人の多くの証言にてらしてみて、スペイン領アメリカ貿易に占めるフランスの相対的地位が一七世紀後半から一八世紀後半にかけて低下の傾向にあったこと、またその重要な原因がイギリス、オランダ両国によるスペイン領アメリカへの直接密貿易の拡大にあったことは、ほぼ間違いのないところと考えられる[10]。

本稿はさしあたりスペイン本国とアメリカ植民地との間の貿易に対象を限定して、その中に占めるフランスの相対的地位が一八世紀の間にどのように変化していったかを、可能な限り明確にしようとするものである。しかし、このフランスの相対的地位を直接に把握することは史料的にきわめて困難なので、ここではつぎのような方法で問題に接近することにしたい。まず第一に、一八世紀におけるスペイン本国とアメリカとの間の貿易の状況、その動態と構造とをできるだけ正確に把握することを試みる。この点については幸い前述のゴンサレスによって、第一次史料に立脚した詳細な研究が発表されているので[11]、以下それに全面的に依拠することにしたい。つぎに第二に、同じく一八世紀におけるフランス＝スペイン本国間の貿易の動態と構造とを、同時代のフランスの貿易統計によって明確にすることにつとめたい。そして第三に、

このようにしてスペイン＝アメリカ間貿易およびフランス＝スペイン間貿易について知りえたところから、スペイン＝アメリカ貿易に占めるフランスの地位の変動を探ってみることにしたい。なお、ここで一八世紀に考察の範囲を限定する理由は、一つには一七世紀末以前については史料と研究文献の決定的不足のゆえに立ち入った検討が不可能なためであるが、より積極的には、筆者の現在の関心が一八世紀の国際貿易の主要セクターあるいは海外諸市場に占めるフランスのシェアの再検討という点に向けられているためであり、そうした作業の一環として以下スペイン＝アメリカ貿易を取り上げることにしたい。

① さしあたり M. Savelle, *Empires to Nations: Expansion in America, 1713-1824*, 1974, pp. 77-78; 近藤仁之「スペイン経済の盛衰」（角山栄他編『講座西洋経済史』第一巻、同文舘、一九七九年、所収）、一三〇—一三二頁参照。

② C. H. Haring, *Trade and Navigation between Spain and the Indies in the Time of the Hapsburgs*, 1918; A. Girard, *Le commerce français à Séville et Cadix au temps des Habsbourg*, 1932; E. J. Hamilton, *American Treasure and the Price Revolution in Spain, 1501-1650*, 1934; H. et P. Chaunu, *Séville et l'Atlantique (1504-1650)*, 12 vol., 1955-60.

③ A. García-Baquero González, *Cádiz y el Atlántico (1717-1778). El comercio colonial español bajo el monopolio gaditano*, 2 tomos, 1976; do., *Comercio colonial y guerras revolucionarias. La decadencia económica de Cádiz a raíz de la emancipación americana*, 1972.

④ たとえば F. Braudel et E. Labrousse, éd., *Histoire économique et sociale de la France*, t. I, 1977, pp. 1007-1008, t. II, 1970, p. 229 におけるM・モリノーとP・レオンの叙述、あるいは P. Léon, éd., *Histoire économique et sociale du monde*, t. III, 1978, p. 73 におけるP・ビュテルの指摘などをみよ。

⑤ このような見方を確立したのは、いうまでもなく大塚久雄『近代欧洲経済史序説』（初版一九四四年、『大塚久雄著作集』第二巻、岩波書店、一九六九年、所収）であるが、最近でもこの点に異議をさし挟んだ研究は見当らないように思う。

⑥ Patoulet, Mémoire sur le commerce de Cadix et des Indes occidentales, 1686, Arch. des Aff. étr., Mém. et doc., suppl. France, 1992, fol. 197-260. Cf. Girard, *op. cit.*, pp. 342 sqq.

⑦ Mémoire touchant le commerce des Indes occidentales par Cadix, 1691, publié dans H. Sée, Documents sur le commerce de Cadix (1691-1752), *Revue d'histoire des colonies françaises*, t. 14, 1926.

⑧ 詳細は後出、表10、および拙稿「フランスにおける経済発展」（『講座西洋経済史』第一巻、同文舘、所収）、一九一頁、参照。

⑨ この直接貿易へのフランスの参加については本稿の末尾において簡単にふれることにする。

⑩ この点については、Cf. H. Sée, Esquisse de l'histoire du com-

merce français à Cadix et dans l'Amérique espagnole au XVIIIe siècle, *Revue d'histoire moderne*, t. III, 1928, pp. 13–25.

⑪ 注⑧に記した二著を指す。

一　一八世紀スペイン＝アメリカ貿易の動態と構造

スペイン王室が一六世紀初頭以来、アメリカ植民地との貿易をセビリャ一港に独占させる政策をとったことはよく知られている。このセビリャのアメリカ貿易独占権は公式には一七一七年にカディスに移され①、以後一七六五年まではカディス港がアメリカ貿易を独占することになる。アメリカ貿易は一七六五年以降カディスを含むスペイン本国の九つの港に開

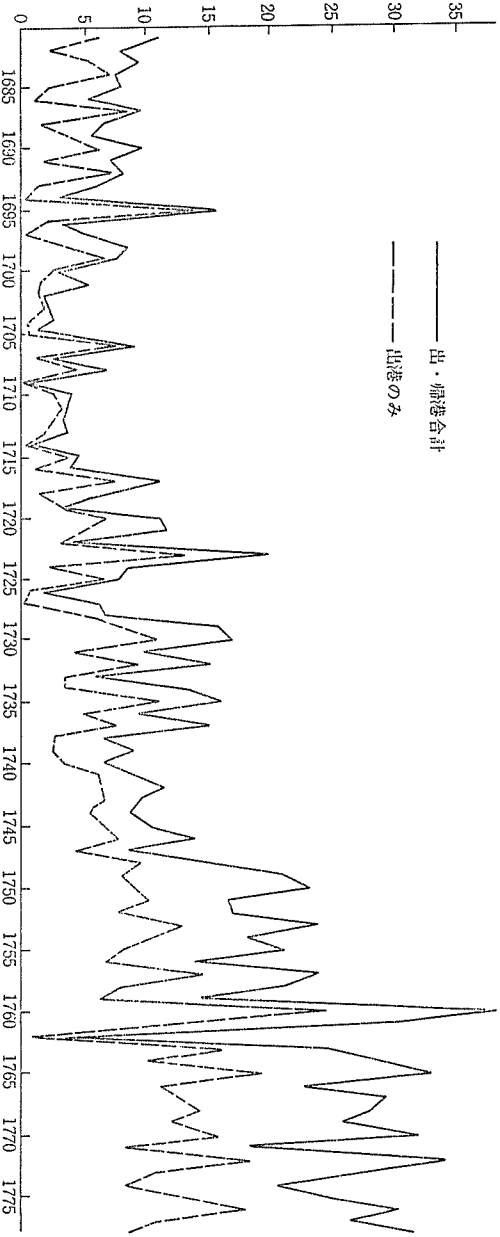


図1　カディス港出・帰港船舶の容量トン数（1681—1778年）

（資料）González, *Cádiz*, t.II, Gráfico 6.

放された。[2] このようにカディスがスペインのアメリカ貿易の独占港であったのは公式には一七一七—六五年の間のみであったが、しかしすでにそれ以前からカディスがアメリカ貿易の事実上の独占基地となっていたことに注意しなければならない。ジラールが詳述しているように、[3] アメリカ貿易に従事する船舶の大型化にともなってグァダルキビル川の遡行が困難となり、こうしてまずアメリカ向け船荷の積み込みは、一七世紀中葉までにその大部分が外洋に接したカディス港で行われるようになり、ついでアメリカからの帰り荷の陸揚げ地も一六八〇年以降カディスへと移動するにいたったのである。他方においてカディスは、一七六五年にアメリカ貿易の独占特権を失ったのちも、一八世紀末にいたるまでアメリカ貿易の独占的基地として機能しつづけた。カディス港の植民地向け輸出は一七七八年にスペイン全体の輸出の六五%を、また一七八八年にはその七二%を表わしていた。[4] これらの点を念頭において、以下ゴンサレスの研究によりながら、カディスとスペイン領アメリカとの間の貿易の動態と構造とについて考察しよう。

表1　カディス港のアメリカ貿易の規模（年平均）

	1681—1709年	1710—47年	1748—78年
出・帰港船舶数	27.3	34.4	76.3
同上容量トン数	6,041.4	8,931.8	23,830.9

（資料）González, *Cádiz*, t. I, p. 541–542.

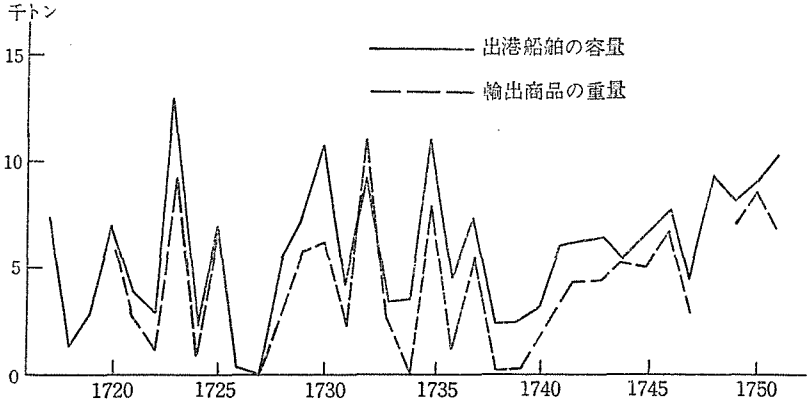
まず図1は、一六八一—一七七八年の各年度においてカディス＝スペイン領アメリカ間を往復した船舶の容量トン数を示したものである。[5] これによると、出港・帰港を合わせた船舶の総トン数についても、また出港船舶のみについても、一六八一年以後一七〇九年まではゆるやかな下降傾向が認められるのに反して、一七一〇年以後は一七七八年まで長期的な上昇の趨勢が読みとられる。ゴンサレスはこのスペイン＝アメリカ貿易の発展過程を、一六八一—一七〇九年の衰退期、一七一〇—四七年の緩慢な成長期、一七四八—七八年の加速的成長期の三つに区分する。[6] これら三つの時期における貿易規模を

表2　カディス港における船舶容量トン数の変動（年平均）

年	出・帰港合計	出港のみ
	トン	トン
1710—16	3,400	2,200
1717—23	9,451	5,504
1724—28	6,061	2,953
1729—37	13,060	6,801
1738—48	9,822	4,951
1749—58	20,045	9,967
1759—62	21,641	10,518
1763—78	27,286	13,063

（資料）González, *Cádiz*, t. II, Cuadro N° 20 および Gráfico 6 により作成。

図2　カディス港の輸出の動き（1717—51年）



（資料）González, *Cádiz*, t. II, Gráfico 15.

年平均で示せば表1のようであり、一七四八—七八年におけるスペイン＝アメリカ貿易の規模が一七一〇—四七年のそれを大幅に上まわったことが確認される。しかしここで強調しておきたいのは、一七一〇—七八年を通じてのアメリカ貿易の持続的拡大であり、それをより明確に示すために作成したのが表2である。これによると、船舶の容量トン数は一八世紀前半においては一七一七—二三年と一七二九—三七年とに著しい増加を示しているが、しかし一七二九—三七年の平均水準も一七四九—五八年のそれによって大幅に凌駕されており、さらに一七六三—七八年の平均水準は一七四九—五八年のそれをはるかに上まわっている。

以上の出・帰港船舶の容量トン数の時系列は出・帰港船舶数の時系列とともに、スペイン＝アメリカ貿易の動態を最も長期間にわたってあとづけることのできる資料ではあるが、しかし船舶数はもちろん、容量トン数の動きにしても、実際の積荷トン数の動きと正確に一致しないことはいうまでもない。そこで貿易の動態をより正確に把握するためには、輸出・入された商品の数量および価額の変動を明らかにすることが不可欠であるが、残念ながらこれらに関するデータは一八世紀の限られた時期についてしか得られない。この点についてのゴンサレスの分析結果を示すならば、図2および表3・4のようである。まずアメリカ向け輸出商品の数量についての包括的なデータは一七二〇—五一年をおおうのみであるが、その重量ト

表3　カディス港への貴金属の輸入（年平均）

	1717—38年	1747—78年
	ペソ	ペソ
金	921,943	2,206,271
銀	6,010,265	11,535,242
合　計	6,932,208	13,741,513

（資料）González, *Cádiz*, t. I, p. 344.

表4　カディス港へのアメリカ物産の輸入（年平均）

	1717—38年		1747—78年	
	アローバ	%	アローバ	%
コチニール	9,354	(7.3)	20,045	(3.8)
インジゴ	9,423	(7.3)	16,622	(3.2)
染料木	4,346	(3.4)	33,987	(6.4)
タバコ	51,277	(40.0)	67,380	(12.8)
カカオ	37,976	(29.6)	189,617	(36.0)
砂糖	8,836	(6.9)	151,980	(28.8)
銅	1,970	(1.5)	29,389	(5.6)
錫	—		3,719	(0.7)
薬用植物	3,790	(3.0)	13,093	(2.5)
その他	1,270	(1.0)	1,527	(0.3)
合　計	128,242	(100.0)	527,359	(100.0)

1アローバは約11.5キログラム
（資料）González, *Cádiz*, t. I, pp. 338-341.

ン数は図2が示すように、カディス港から出航した船舶の容量トン数とほぼ並行した動きを示している。いま一七二〇—二五年、一七二九—三七年、一七四四—五一年の各時期について輸出積荷の平均量を示せば、それぞれ四四四六トン、四六八一トン、六一六六トンであり、[7] カディス港のアメリカ向け輸出活動が一八世紀前半に拡大の傾向にあったことはここでも確認される。ところで、このようにアメリカ向け船舶の容量トン数の動きと輸出商品の実際の重量の動きとが基本的に一致するとするならば、右の容量トン数が前述のように顕著な増加をみせた一八世紀後半には、現実の輸出量も並行して著しい増加をとげたものと推定してよいであろう。

つぎにアメリカからの貴金属の輸入額については、一七一七—三八年と一七四七—七八年とに関してのみ連年統計が存在する。それによると、金銀の輸入額は年々の変動がとくに激しいが、一七四九年にはじめて年間二〇〇〇万ペソを超えており、その後も一七七六年まで平均して世紀の前半よりもはるかに高い水準を維持している。[8] 表3によれば、一七四七—七八年における金銀の年平均輸入額は一七一七—三八年のそれの二倍近くに達しており、世紀後半における金銀輸入の急増は明らかである。なお、右の二つの時期を通じてスペイン領アメリカからもたらされる貴金属の中では、銀が圧倒的大部分を占めていたことに注意しておこう。さらに、貴金属以外の各種商品の輸入量についても同じ時期に関して連年統

計が存在するが、それら商品の年平均輸入量を一七一七—三八年と一七四七—七八年とについて比較すれば表4のようである。みられる通り第二の時期には第一の時期に比べてすべての商品の輸入量が増加を示しており、全体では増加率は四倍強に達する。ところで一七四七—七八年については、これら一般の商品についてもその年々の輸入額を知ることができる。そこで、貴金属とその他の商品とを合わせたアメリカからの総輸入の年平均価額を一七四七—六二年と一七六三—七八年とについて比べてみると、それぞれの時期について一七〇〇万ペソ、二〇八〇万ペソという数字が得られるのである。[9]

表5　カディス港のアメリカ向け輸出の構成（重量評価）

	A (1720—51年)	B (1717—35年)	C (1757—76年)
	%	%	%
ブドウ酒と酢	19.08	12.03	9.13
火酒	17.13	14.21	13.95
油	5.34	5.88	1.90
香料	2.51	3.78	3.08
他の農産物	1.51	0.55	0.10
繊維製品	38.75	45.17	51.31
鉄鋼・金属製品	5.99	5.83	4.02
紙	5.44	6.44	11.92
他の製造品	4.25	6.11	4.59
農産物合計	45.57	36.45	28.16
工業生産物合計	54.43	63.55	71.84

（資料）González, *Cádiz*, t. I, pp. 331-332.

さらにここでつけ加えておかなければならないのは、カディス港の植民地貿易活動が一七七八年以後に新たな飛躍的拡大をとげ、一七九六年におけるスペイン＝イギリス間の海上戦争の開始までおおむね繁栄をつづけたことである。[10] ゴンサレスはこの時期については出・帰港船舶に関する統計をあげていないが、彼の記述によれば、カディス港からの植民地向け商品輸出額は一七九二年のピーク時に三億〇七三五万レアルに達した。[11] これは一七七八年に比べて実に六倍の増加であるとされるが、一七七八年が植民地向け輸出の収縮の年であったことを考慮しても、驚くべき増加であるといわねばならない。[12]

以上いくつかの指標について検討したところから、一八世紀スペイン＝アメリカ貿易の動態についてつぎのように結論できよう。すなわち、ほぼ一七一〇年代から着実に成長しはじめたスペイン＝アメリカ貿易は、世紀の中葉に至ってその成長速度を早めつつ、七年戦争後、一七六三年から九〇年代にかけて最大の繁栄期を迎えることになった、と。そこでつぎに、この貿易の構造を輸出・入の商品別構成という面から考察することにする。まず、アメ

リカ植民地からカディスへもたらされた商品のうち、貴金属以外の内訳は前掲表4のようである。みられる通り、一七一七―三八年、一七四七―七八年のいずれにおいても砂糖・カカオ・タバコと各種染料との四つが全輸入量の九〇％以上という圧倒的部分を占めているが、第一の時期にはタバコとカカオが群を抜いて大きな比重を占めているのに対して、第二の時期にはタバコの比重が激減する一方、砂糖の比重が急上昇をとげたことが注目される。ここでアメリカからの総輸入に占める貴金属とその他の商品との比率をみておくならば、一七四七―七八年における貴金属の輸入額は年平均一三七四万ペソ、同じ期間の他の商品の輸入額は年平均三九八万ペソ、とそれぞれ評価され、貴金属が輸入総額の七八％を占めていたことになる。[13] ちなみに一五八四―一六五三年についてはショーニュによってアメリカからの輸入総額に占める貴金属の比率八四％、他の商品の比率一六％という数字が提出されているが、[14] 一八世紀後半においてもアメリカからの帰り荷の圧倒的部分が貴金属、とりわけ銀からなっていたことは疑問の余地がない。

つぎにカディス港からアメリカ植民地へ輸出された商品の内訳をみると表5のようである。この表のA欄、一七二〇―五一年に関する数字は、この間のすべての船舶による輸出を網羅しているが、これによると、総輸出量約一三万トン[15]のうち農産物が四六％、工業生産物が五四％をそれぞれ占める。農産物の中ではブドウ酒・火酒・油が三大品目を形づくり、工業生産物の中では織維製品[16]が支配的部分を形成し鉄鋼・金属製品と紙がこれにつづいている。いうまでもなく輸出の商品別構成を正しく評価するためには各商品の比重を重量ではなく価額で示す必要があるが、それは後述の一七五七年の場合をのぞいて不可能である。ところで、一七五二年以降の輸出については一七五七―七六年にヌエバ・エスパーニャ（メキシコ）に派遣された六回の船団（フロータ）についてしかデータを得ることができない。[17] 表5のC欄はその積荷の内容を示したものであるが、これによると、総輸出量五万四〇〇〇トン[18]のうち農産物が二八％を、織維製品を主体とする工業生産物が七二％をそれぞれ占めている。いまこれを同じ表のB欄に示した一七一七―三五年の七回のフロータの積荷と比較すれば、世紀の後半には総輸出量に占める農産物の比重がかなり低下し、工業生産物、とりわけ織維製品と紙の比重が

かなり上昇している。一八世紀後半についても、船団を組まずにアメリカへ向った「単独登録船」registros sueltos[19]の積荷をも含めて考察する必要があるが、そうした場合にも、世紀の後半にはその前半に比べてアメリカ向け輸出に占める工業生産物、とりわけ繊維製品の比重が上昇をみたことは、恐らく動かないところであろう。

ここで筆者が最も知りたい点は、右のアメリカ向け輸出商品がいかなる国の生産物であったかであるが、残念ながらこの点については一七七八年以前に関する限りカディス港の貿易統計はほとんど何らの指示も与えていない[20]。しかしゴンサレスは、若干の史料にもとづいて、一七五七年のフロータによる輸出商品についてつぎのような推論を行っている[21]。このフロータによる輸出総額は二二六三万ペソであるが、このうちもっぱらスペイン産品とみなしうる商品（農産物・鉄・金具・ワックス等）はわずか一八八万ペソ（八・三％）にすぎない。これに対して繊維製品は全体で二〇〇七万ペソ（八九％）に達するが、このうち確実に外国製品とみなされるものが約一三〇〇万ペソ（五七％）、スペイン製品を含む可能性のある銘柄が約七〇〇万ペソ（三一％）と評価される[22]。いま後者の七〇〇万ペソのうち二五％（この比率は全く非現実的なほど高いが）がスペイン製品であると仮定するならば、前述の一八八万ペソと合わせてスペイン産品は三六三万ペソとなり、一七五七年のフロータによる輸出総額の一六％にすぎないことになる。ゴンサレスは、この五七年のフロータの積荷が植民地向け輸出の平均的構成をどの程度表わしているかは不明であり、単独航行船の積荷についても同様の考察を行う必要があると述べているが、しかしともかくスペインのアメリカ向け輸出額の圧倒的部分が外国産の繊維製品からなっていたことは、疑いのないところであろう。

それではこのアメリカ向け繊維製品の供給に占めるヨーロッパ各国のシェアはどのようであったか。ゴンサレスの分析によれば、カディス港の貿易統計には外国産の繊維製品の例としてフランス・イギリス・オランダ・フランドル・ハンブルク・ジェノヴァ・ミラノ・ヴェネツィア・リヴォルノなどの実に様々の麻（亜麻）製品・羊毛製品・絹製品の名があがっているが[23]、全体として麻織物と毛織物とのどちらがより重要であったか、またフランス製品とイギリス製品のうちどちら

がより大きな部分を占めていたか、といった点についてはそこから明確にすることはできない。このフランスの相対的地位の問題はしばらく保留することにして、つぎに一八世紀におけるフランスとスペイン本国との間の貿易の動向を考察することにしよう。

① González, *Cádiz*, t. I, p. 104; Girard, *La vivalité commerciale et maritime entre Séville et Cadix jusqu'à la fin du XVIIIe siècle*, 1932, pp. 79-80. この年に植民地貿易の統轄機関たる「商務院」Casa de Contratación がセビリヤからカディスに移された。

② González, *Cádiz*, t. I, p. 104. ここに始まったスペイン植民地貿易の自由化は一七七八年以降一層の進展をみる。近藤・前掲論文、一四六頁。

③ Girard, *La vivalité commerciale*, pp. 15-34, 47, 64, 111-112.

④ González, *Comercio*, p. 128. 他方、カディスが植民地貿易の独占権を有した一七一七—六五年においても、スペイン=アメリカ間に就航した船舶のすべてがカディスを発着地としたわけではない。しかし、ゴンサレスによれば、この期間におけるカディス港への集中率はアメリカ向け出航船舶の八八%、帰航船舶の八二%に達しており、「カディスの独占の有効性は疑う余地がない。」González, *Cádiz*, t. I, p. 111.

⑤ 史料は出・帰港船舶の登録簿 libros de registro である。Cf. *Ibid.*, pp. 21-26. スペイン=アメリカ植民地間の就航船舶数・容量トン数の変動についてはつとにショーニュ夫妻によって一五〇六—一六五〇年にわたる時系列が作成されており、ゴンサレスの研究によって一六八一—一七七八年の期間がカヴァーされるにいたった。残る空白は一六五〇—八〇年であるが、この期間については史料に欠落があり解明困難のようである。*Ibid.*, p. 537.

⑥ *Ibid.*, pp. 540-543.

⑦ González, *Cádiz*, t. II, pp. 212-219, Cuadro N° 36 にもとづき計算。

⑧ *Ibid.*, pp. 250-252, Cuadro N° 40 に示された金銀の年々の輸入額をみよ。

⑨ *Ibid.*, pp. 264-265, Cuadro N° 43 にもとづき計算。

⑩ González, *Comercio*, pp. 127-130. とくにアメリカ独立戦争後の輸出増加がめざましい。

⑪ *Ibid.*, p. 128. これは一七七八年の公式価格による評価であり、九二年の時価では三億四八八八万レアルとなる。

⑫ この一八世紀末のスペイン植民地貿易の繁栄は一七九六年の対英戦争開始、翌九七年の植民地における中立国貿易の自由化とともに急速に失われた。González, *Comercio* はその過程を詳述している。

⑬ González, *Cádiz*, t. I, p. 349.

⑭ Chaunu, *op. cit.*, t. VI-1, pp. 462-463, Tableau 217A.

⑮ González, *Cádiz*, t. I, p. 308.

⑯ この織維製品の中には "efectos de palmeo" の名称の下に少量ながら針・ピン・ボタン・バックル・鋏などの小間物・金物類が含まれている。また同じ織維製品は厳密な意味での奢侈品から日常必需品にいたる多種多様な品目を含むが、一七五五年の輸出品一覧表によれば全品目の三五%がほぼ奢侈品、残り六五%が一般消費品とみなされるという。*Ibid.*, pp. 320-321.

⑰ ここでスペイン=アメリカ間の輸送制度について一言すれば、一八

世紀に入ると伝統的な二大船団制度はすでに著しく弛緩し、まず南米本土 Tierra Firme 向け船団 galeones は一七三七年を最後に廃止された。また、メキシコ貿易のための flota 制も一七三九―五四年の間停止されたほか、本来二年間隔であった船団の派遣も不規則となり、一七〇六―七六年の間に二〇回送られたにすぎない（一七八三年最終的に廃止）。González, *Comercio*, pp. 51-52; Savelle, *op. cit.*, p. 80.

⑱ González, *Cádiz*, t. I, p. 331.

⑲ 「商務院」の特許状によるこの「単独登録船」は、一八世紀初めから次第に増加し、フロータ制が停止された一七三九―五四年にはアメリカ貿易の唯一の輸送形態となり、さらにフロータが復活された一七五五―七八年にも全貿易量の八〇％を引受けることになった。*Ibid.*, pp. 165-174.

⑳ *Ibid.*, p. 323. 一七七八年以後はカディス港の船荷記録に個々の輸出品の生産地が記されている由であるが、ゴンサレスはこの史料の分析結果をくわしく述べていない。Cf. González, *Comercio*, p. 58.

㉑ do., *Cádiz*, t. I, pp. 329-330. 一七五七年のフロータの積荷についてのみは商品別の輸出額が記されているという。

㉒ 織維製品総額は二〇〇七万ペソであるから正確には数字が一致しないが、理由は不明。

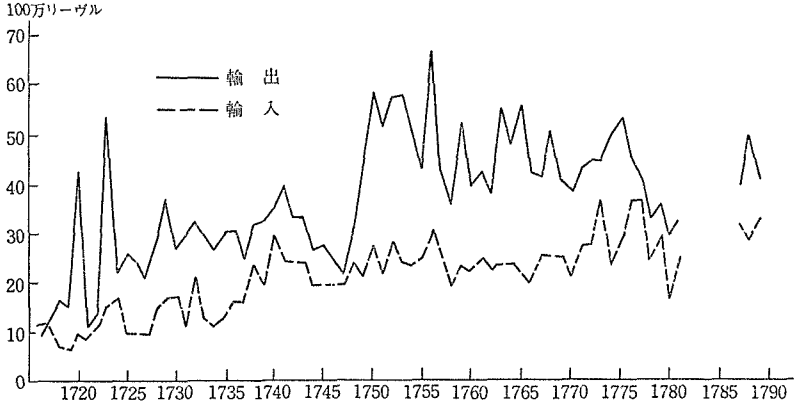
㉓ *Ibid.*, pp. 324-325.

二　一八世紀フランス＝スペイン貿易の動態と構造

一八世紀におけるフランス＝スペイン間の貿易関係については、スペイン側の貿易＝関税政策の展開を中心にその制度的・政策的側面を考察したH・セーやG・ランベールの論文[1]が存在するが、しかし現実の貿易の動態と構造についてはなお体系的検討が加えられていない。[2] それゆえここではフランス側の貿易統計にもとづいて、その点に関する基礎的事実の確定につとめたいと思う。

さて「貿易差額事務局」Bureau de la Balance du Commerce の資料[3]によると、一七一六年以降一七八九年まで、一七八二―八五年をのぞく各年度のフランスの対スペイン輸出・入額は図3に示した通りである。[4] これによると、まずスペインからの輸入額（ただし金銀は含まない）[5]は一七一九年から四〇年にかけては顕著に上昇しているが、一七四〇年から七〇年にかけては明らかに伸び悩みもしくは低落を示している。そして一七七〇年代に入って再び著しい上昇をとげ、七六―七七年に一八世紀の最高額を記録したのち、七八―八一年に急落し、八七―八九年においても七六―七七年のレヴェ

図3　フランスの対スペイン輸出入額の変動（1716—89年）



（資料）　本節注④に記した諸資料により作成。

ルをかなり下まわっている。また、一七七六—七七年のピーク時の輸入額（年平均三五八三万リーヴル）は一七一六—一九年の輸入額（年平均八八五万リーヴル）の四倍に相当するが、この増加率は同じ期間のフランスの輸入総額の増加率（六・四倍）に比べてはるかに低いのである。⑥

つぎにスペイン向け輸出額は、一七一七年から上昇に向い、一七二〇—二三年には急激な上昇と下降をくり返したが⑦、一七二七年から四一年にかけてはゆるやかな上昇傾向を示し、一七四二—四七年の落ち込みののち、一七四九—五〇年にめざましい上昇をとげて五六年に一八世紀の最高値を記録している。ついで輸出額は一七五七—六二年に低落したのち六三—六五年にはかなりの回復をとげているが、しかしその後は一七八〇年代末まで全般的に伸び悩みもしくは低下を示したようにみえる。いま一七四九—五六年をもって対スペイン輸出の最盛期とみるならば、その年平均額五三三四万リーヴルは一七一六—一九年の年平均輸出額一三四三万リーヴルの約四倍、また一七二九—四一年の年平均輸出額三〇三六万リーヴルの一・八倍に達する。これに対して一七六三—七六年の年平均輸出額四六一七万リーヴルは一七四九—五六年のそれの八七%、また一七八七—八九年の年平均輸出額四三四八万リーヴルは四九—五六年のそれの八二%にとどまるのである。⑧

さて図3が明示しているように、フランスの対スペイン貿易は一八世紀

をつうじてフランス側の大幅な輸出超過であった。一七一六—八一年および一七八七—八九年の合計六九年間のうち年間の輸出額が輸入額を下まわっているのは一七一六年のみであり、また輸出額が輸入額の二倍を超える年が二六年をかぞえることからみても、そのことは明らかである。フランスはそのスペイン向け輸出の対価の著しい部分をアメリカ産の金銀によって受け取っていたのであり、⑨したがってフランスの対スペイン貿易の盛衰の決定要因、あるいはそのバロメーターとなるものはフランスからの輸出の動向にほかならなかった。この意味において、輸出が前述のように最大の伸びを示した一七四九—五六年は、一八世紀フランスの対スペイン貿易の最盛期であり、また輸出が絶対的に減少した一七六三年以降この貿易は漸次衰退過程に入ったとみてよいであろう。

表6　フランスの対スペイン輸入の構成（年平均）

	1750—51年		1776—77年		1787—88年	
	千リーヴル	%	千リーヴル	%	千リーヴル	%
原料	19,334	(80.40)	26,877	(75.01)	15,667	(49.41)
羊毛	12,860	(53.48)	13,437	(37.50)	5,703	(17.99)
絹	1,201	(4.99)	67	(0.19)	270	(0.85)
皮革	515	(2.14)	1,385	(3.87)	2,026	(6.39)
鉄鋼	438	(1.82)	5,178	(14.45)	545	(1.72)
ソーダ	1,559	(6.48)	1,820	(5.08)	1,862	(5.87)
コチニール	2,524	(10.50)	4,213	(11.76)	2,253	(7.11)
インジゴ	238	(0.99)	777	(2.17)	3,007	(9.49)
食料	1,417	(5.89)	3,614	(10.09)	9,726	(30.68)
ブドウ酒	375	(1.56)	593	(1.66)	778	(2.45)
火酒	42	(0.18)	2,086	(5.82)	4,026	(12.70)
油	732	(3.04)	427	(1.19)	3,020	(9.53)
カカオ	136	(0.57)	195	(0.54)	1,265	(3.99)
果実	132	(0.55)	313	(0.87)	637	(2.01)
輸入総額	24,047	(100.00)	35,832	(100.00)	31,704	(100.00)

1787—88年の油はオリーヴ油のみ。
（資料）Bibl. Mun. de Saint-Brieuc, Manuscrits 85; Arch. Nat., F^{12} 243, 245 et 1835.

以上の点を確認した上で、つぎにこの貿易の構造を輸出・入の商品別構成という面から考察することにする。まず輸入についてみると、一七一六—一九年には原料が総額の四七%、食料が四三%、工業製品が一〇%をそれぞれ占めていた。⑩しかるに一七五〇—五一年になると、表6が示すように原料の比重が主要品目のみで八〇%に上昇し、輸入の圧倒的部分を占めるにいたった。このようにフランスは、一八世紀前半にスペインからの原料の輸入を飛躍的に拡大したのであるが、この原料の中で群を抜いて大きな比重を

表7　対スペイン貿易の構造(1787—88年)

	輸　入	輸　出
	%	%
原　料	57.2	15.0
食　料	38.3	29.9
工業製品	4.0	54.5
(繊維製品)	(1.4)	(48.1)
雑商品	0.6	0.6
計	100.0	100.0

(資料)　Arch. Nat., F12 1835.

占めていたのが羊毛[11]であり、それについてはコチニール（洋紅染料）、絹（主に生糸）、ソーダなどが重要であった。これに対して食料の比重は一七一六—一九年に比べて激減したが、その中では油（ほとんどがオリーヴ油）とブドウ酒がめぼしいものであった。全体としてスペインからの輸入品の中では、羊毛を筆頭とするスペイン本国産品が圧倒的部分を形づくっており、スペイン領アメリカ物産は染料（コチニール・インジゴ）を除いては少額にとどまっていたのである。

フランスの対スペイン輸入額は、前述のように一七七六—七七年に一八世紀の最高を記録したが、表6によれば、この両年においても原料が主要品目のみで総額の七五%を占めている。一七五〇—五一年と比べれば、原料品中羊毛の輸入が伸び悩み、絹の輸入が激減して、ともに輸入に占める比重を大幅に低下させているが、鉄鋼・皮革・コチニール・インジゴ等の輸入は著しい伸びを示しており、全体として原料の輸入額は一七五〇—五一年のそれをかなり上まわっている。

このような輸入の構造は一七八〇年代になると大きな変化をとげるにいたる。ここで表6を補足するために一七八七—八八年の全輸出・入の構成比を示した表7を掲げるならば、この時期には輸入に占める原料の比重が六〇%以下にまで低下し、代って食料の比重が四〇%近くにまで上昇している。表6によれば原料の輸入額は一七八七—八八年には七六—七七年に比べて約五分の三に減少しているが、その最大の原因は羊毛の輸入が二分の一以下に激減したことにある。[12] 一方、食料の輸入のめざましい増加は主として火酒とオリーヴ油の輸入の急増によるものであった。

つぎにスペイン向け輸出の商品別をみると、一七一六—一九年には工業製品が総額の六五%、食料が二九%、原料が六%をそれぞれ占めていた。[13] しかるに一七五〇—五二年になると、工業製品の比重が表8に示した主要品目のみで七四%、全体ではおそらく八〇%前後にまで上昇をとげている。この工業製品の中で圧倒的に重要なのが繊維製品であり、その輸

出は総額の六五%、工業製品輸出の八五%以上という尨大な比率に達している。まさしく繊維製品こそはこの時期におけるフランスのスペイン向け輸出の拡大を支える基軸商品であったのである。[14] この繊維製品の中では麻織物[15]が群を抜いて大きな比重を占めるが、しかし絹織物・毛織物・レース・靴下・リボンなどもかなりの額にのぼっている。[16] これに対して食料はこの時期には輸出のきわめて小さな部分を占めるにすぎなくなっているが、その中ではフランス領西インド産の砂糖

表8　フランスの対スペイン輸出の構成（年平均）

	1750—52年		1775—77年		1787—88年	
	千リーヴル	%	千リーヴル	%	千リーヴル	%
工業製品	41,082	(74.28)	37,644	(82.24)	22,156	(49.21)
繊維製品	35,886	(64.88)	33,504	(73.20)	20,715	(46.01)
麻織物	15,678	(28.35)	16,904	(36.93)	11,135	(24.73)
綿織物	—		—		775	(1.72)
毛織物	4,825	(8.72)	3,329	(7.27)	4,935	(10.96)
絹織物	6,582	(11.90)	8,449	(18.46)	1,063	(2.36)
レース	3,159	(5.71)	496	(1.08)	135	(0.30)
リボン	1,768	(3.20)	563	(1.23)	331	(0.74)
帽子	668	(1.21)	1,119	(2.44)	423	(0.94)
靴下	3,094	(5.59)	2,370	(5.18)	1,798	(3.99)
飾り紐	112	(0.20)	275	(0.60)	120	(0.27)
金めっき物	3,238	(5.86)	1,763	(3.85)	54	(0.12)
小間物	1,512	(2.73)	1,932	(4.22)	834	(1.85)
金物	237	(0.43)	226	(0.49)	212	(0.47)
紙	209	(0.38)	219	(0.48)	341	(0.76)
食料	5,803	(10.49)	3,067	(6.70)	11,010	(24.45)
穀物	1,471	(2.66)	1,276	(2.79)	4,959	(11.01)
小麦粉	12	(0.02)	180	(0.39)	945	(2.10)
家畜	150	(0.27)	192	(0.42)	2,482	(5.51)
ブドウ酒	34	(0.06)	522	(1.14)	336	(0.75)
火酒	144	(0.26)	275	(0.60)	1,065	(2.36)
砂糖	2,854	(5.16)	394	(0.86)	1,010	(2.24)
カカオ	1,138	(2.06)	227	(0.50)	214	(0.47)
原料	1,125	(2.03)	1,106	(2.42)	4,862	(10.80)
綿糸	213	(0.38)	68	(0.15)	1,824	(4.05)
絹	95	(0.17)	14	(0.03)	850	(1.89)
皮革	786	(1.42)	731	(1.60)	805	(1.79)
駄獣	31	(0.06)	292	(0.64)	1,383	(3.07)
輸出総額	55,303	(100.00)	45,772	(100.00)	45,026	(100.00)

1750—52年，1775—77年の麻織物の数字は少額の綿織物を含む。
（資料）Bibl. Mun. de Saint-Brieuc, Manuscrits 85; Bibl. Mun. de Rouen, Fonds Montbret 849; Arch. Nat., F^{12} 242, 243, 245 et 1835.

が最大の比重を占めている。

さて表8によれば、スペイン向け輸出に占める繊維製品の比重は一七七五—七七年には一層増大して総額の七五%前後に達したとみられる。この時期にはスペイン向け輸出総額は一七五〇—五二年に比べてかなり減少しているが、繊維製品の輸出額は輸出総額ほどには減少しておらず、とりわけ最大の輸出品目たる麻織物、第二位の絹織物については五〇—五二年に比べて輸出の絶対的増加が認められるのである。[17] もっとも麻織物については一七五四—五七年に、五〇—五二年を明確に上まわるスペイン向け輸出額が記録されているので、[18] 一七五〇年代よりも七〇年代に輸出が増加したとは速断できないが、[19] しかしスペイン向け輸出が全般的収縮局面に入った七〇年代半ばにおいても麻織物の輸出が五〇年代と大差のない水準を維持していたということは、誤りなく指摘しうるであろう。

表9　スペイン向け麻織物・絹織物輸出の変動(単位：千リーヴル)

年	麻織物	絹織物
1776	17,890	7,382
1777	14,037	7,639
1778	9,017	5,465
1779	10,879	5,640
1780	6,998	3,880
1782	9,763	1,009
1787	9,911	926
1788	12,359	1,200

1776—80年の麻織物の数字は少額の綿織物を含む。
(資料)　Arch. Nat., F^{12} 243, 245–249, 1835.

ところで一七八七—八八年になると、輸出の構造にも著しい変化が生じた。さきの表7が示すように、この時期には工業製品が輸出総額の六〇%を下まわるようになり、また繊維製品の比重も五〇%以下に低下するにいたったのである。表8によると、繊維製品はほとんどの品目が一七七五—七七年に比べてその輸出額を低下させているが、なかでも最大の輸出商品たる麻織物の輸出額がいっきょに三分の二に減少したこと、また麻織物に次ぐ地位を占めていた絹織物の輸出額が約八分の一に激減したことが、[20] 注目を引く。ここで一七七六—八八年における麻織物・絹織物の輸出の推移をより細かくみるならば、表9のようであり、これら織物のスペイン向け輸出額がアメリカ独立戦争期の一七七八—八二年を画期として決定的に低下したことがわかる。[21] このような繊維製品輸出の衰退とは対照的に、一七八七—八八年には食料と原料の輸出がめざましい伸びを示し、とくに食料はスペイン向け輸出総額の三〇%を占めるようになった。この食料の中では小麦

を主体とする穀物が全体の三分の一以上を占め、[22] つづいて家畜・火酒・砂糖・小麦粉などが多少とも重要な地位を占めていた。

以上に述べたように、フランスのスペイン向け輸出は一七一六年以降五〇年代半ばにかけて著しい拡大をとげたのち、一七五七―六二年を画期として収縮に向い、一七七〇年代および八〇年代には輸出額は五〇年代に比べてかなりの減少をみるにいたった。また、五〇年代半ばにいたるスペイン向け輸出の拡大を支えたものは繊維製品、とりわけ麻織物の輸出であったが、この麻織物の輸出額も七〇年代半ばまで五〇年代の高水準をほぼ維持したのち、八〇年代には大きく低下するのである。このようなフランスのスペイン向け輸出の動態を前節で検討したスペイン＝アメリカ貿易の動態と対比するならば、大まかにいって両貿易の動きは七年戦争（一七五六―六三年）以前においては基本的に一致し、それ以後は大きく相違するということができよう。すなわち前掲の図1と図3とを突き合わせてみれば、フランスのスペイン向け輸出とスペインのアメリカ向け輸出は、ともに一七一〇年代半ばから四〇年代にかけてゆるやかな上昇を示したのち、四八、九年から五六、七年にかけて急激な拡大をとげている。しかるにスペイン本国のアメリカ向け輸出が一七六三年以降も五〇年代の水準をはるかに超えて拡大をつづけているのに対して、フランスのスペイン向け輸出は一七六六年以後、五〇年代の水準を明確に下まわるようになったのである。このような両貿易の動きから、スペイン＝アメリカ貿易に占めるフランスの相対的地位はほぼ七年戦争期を境に低下するにいたったものと推定されるのであるが、つぎにその点をより具体的に把握するために、われわれはいま一度カディスに目を転じることにしよう。

① H. Sée, Esquisse de l'histoire du commerce; G. Rambert, La France et la politique commerciale de l'Espagne au XVIIIe siècle, *Rev. d'hist. mod. et contemp.*, t. VI, 1959, pp. 269-288.

② 対スペイン貿易は一八世紀フランス貿易史の中でも最も研究の遅れている分野である。筆者はさきに別稿「十八世紀におけるフランス対外貿易の展開過程」（『京都大学文学部研究紀要』一九号、一九七九年）において、フランス貿易全体の枠組みの中で対スペイン貿易の動向に若干ふれておいた。

③ この貿易統計の性格と史料的価値については前注の拙稿、七―一一頁を参照。

④ データは、一七一六—八〇年については R. Romano, Documenti e prime considerazioni intorno alla《Balance du commerce》della Francia dal 1716 al 1780, *Studi in onore di Armando Sapori*, 1957, t. II, pp. 1267–1299. に依拠し、一七八一年および一七八七—八九年についてはそれぞれ Bibl. Mun. de Rouen, Fonds Montbret 155-4; Arch. Nat., F¹² 251 所収の原統計によった。

⑤ 正確にいえば、一七八一年以前の輸入額は少額の金銀を含んでいるが、統計的にこれを分離できない。

⑥ Romano, op. cit., Appendice N. 1 参照。

⑦ 一七二〇年と二三年の輸出の異常な伸びには、フランス国内のインフレーションによる輸出品単価の急騰によって水増しされている部分があるが、しかしこの両年にはスペイン領アメリカ市場が著しく拡大されたことも間違いないようである。実際一七二〇年にはジョン・ローの「インド会社」が南米太平洋岸へ強力な船隊を派遣しており、また二三年には前掲図1・2が示すようにカディスのアメリカ向け輸出量も急増している。Cf. J. Tanguy, La production et le commerce des toiles《bretagnes》du XVIe au XVIIIe siècle, *Actes du 91e congrès national des sociétés savantes, Rennes, 1966*, 1969, p. 111.

⑧ 前出、注④の諸資料にもとづき計算。

⑨ この点については前掲拙稿「十八世紀」、二一頁注⑤参照。

⑩ Arch. des Aff. étr., Mémoires et documents, Espagne 94 の対スペイン輸出入統計による。

⑪ 一七五二年においてスペインはフランスの羊毛輸入全体の三分の二を供給していた。Bibl. Mun. de Rouen, Fonds Montbret 849.

⑫ ただし、この間の羊毛価格の低下のゆえに、羊毛の輸入量は一七七六年の四万四〇〇〇カンタルから一七八八年の二万九三〇〇カンタルへと約三分の二に減少したとどまる。データは Arch. Nat., F¹² 244 et F¹² 1835.

⑬ 本節注⑩の史料による。

⑭ この時期にスペインはフランスの輸出繊維製品の四割近くを吸収していた。前掲拙稿「十八世紀」、四五頁、表13参照。

⑮ この麻織物（主体は亜麻織物）は史料には“Toiles”の名で現われるもので、綿との交織物や純綿織物をも含みうる。後者を分離することは一七八二、八七—八八年以外については不可能であるが、その比率はネグリジブルとみてよい。

⑯ これらスペイン向け繊維製品のフランス国内における生産地を確定することは史料的に不可能であるが、麻織物の中ではブルターニュ産の亜麻織物がずばぬけて大きな比重を占めていたようである。

⑰ 一七五〇—五二年と一七七五—七七年との繊維製品の輸出量を比較することは、同一織物でも銘柄によって輸出量の表示単位が異なるために不可能である。しかし筆者が麻織物について一七五〇年と七六年の貿易統計により輸出価格を比較したところでは、大多数の銘柄の単価はこの間に多かれ少なかれ低下している。それゆえこの両時点の比較では、麻織物の輸出量の増加は輸出額の増加よりも大きかったはずである。資料は Bibl. Mun. de Saint-Brieuc, Manuscrits 85; Arch. Nat., F¹² 244.

⑱ スペイン向け“Toiles”の輸出額は一七五四年二〇五三万リーヴル、五五年一六六九万リーヴル、五六年四〇三二万リーヴル、五七年一六六六万リーヴルとなっている。Bibl. Mun. de Rouen, Fonds Montbret 155 (1-3). ただし五六年の数字は大いに疑わしい。これについては前掲拙稿「十八世紀」、四一頁注㉞参照。

⑲ ただし、タンギイの研究によると、スペイン向け麻織物中の最大品目たる「ブルターニュ織」の輸出量は一七七〇年代には五〇年代に比べて大幅に増加している。すなわち、ブルターニュのサン＝マロ、モ

ルレー、サン＝ブリウの各港からのこの織物のスペイン向け輸出量は、一七四九―五六年の年平均三六九〇梱から一七七〇―七六年には五二三〇梱へと急増をとげた。Tanguy, op. cit., pp. 140-141.

⑳ 輸出統計における麻織物の単価は一七八七年には七六年に比べて低下しておらず、絹織物の単価はいく分上昇していることに注意。八七年の資料はArch. Nat., F12 1835.

㉑ 前述の「ブルターニュ織」の生産量と輸出量も一七七七―七八年以降激減する。Tanguy, op. cit., pp. 138-141.

㉒ この穀物輸出の急増は一七八七年六月一七日の布告による穀物輸出の自由化の結果として生じたものである。

三　スペイン＝アメリカ貿易に占めるフランスの地位

本稿の冒頭でふれたパトゥーレのメモワールによれば、一六八〇年代中頃にヨーロッパ各国の商人がカディス港へもたらした商品の年当り価額は表10のようであり、フランス商人による輸入額はイギリス、オランダ、ジェノヴァの各商人の輸入額の二・三倍―四倍という圧倒的な大きさを誇っている。このフランス商人による輸入額の内訳をみると、麻織物が五八二―五八四万リーヴルで全体の約六〇％を占め、以下毛織物一六二―一六五万リーヴル、絹織物九五―一〇六万リーヴル、レース八二―八三万リーヴル（各商品のフランス国内価格による評価額）の順になっている。①

これらの商品のうちスペイン本国で消費されたものとカディスからさらにアメリカ植民地へ再輸出されたものとの割合をみると、麻織物の約四分の三、毛織物の六〇％以上、絹織物、レースの九〇％がアメリカへ送られたことが確認され、全体を総合すればフランス商品の再輸出率は七五％以上に達したものとみなされる。② パトゥーレはカディスからアメリカへ送られたフランス商品の価額を年間七―八〇〇万リーヴルと見積っているが、③ この数字は前述のイギリス、オランダ、ジェノヴァの各商人のカディスへの輸入額よりもはるかに大きい。また、スペイン領アメリカへ送られたフランスの麻織物が年間四五〇万リーヴルにのぼるのに対して、イギリス毛織物のカディスからアメリカへの輸出額は年間一八四万リーヴルにす

表10　カディス港への各国商人の輸入額（1686年頃）

	千リーヴル
フランス	9,700～9,900
ジェノヴァ	4,300
イギリス	3,700～3,800
オランダ	2,400～2,600
フランドル	1,650～1,700
ハンブルク	1,450～1,500

（資料）Patoulet, Mémoire de 1686, fol. 198-228.

ぎない。[4] もとよりこれらの数字に全幅の信頼をおくことはできないとしても、一七世紀末にスペイン本国からのアメリカ植民地向け商品輸出においてフランスがヨーロッパ列強中最大のシェアをもっていたこと、またとくに繊維製品の輸出額においてフランスがイギリスを遠く引き離していたことは、確実とみてよいであろう。

それではこのようなスペイン＝アメリカ貿易に占めるフランスの支配的地位は、一八世紀の間にどのように変化していったのであろうか。この点についてランベールは、一八世紀初めにスペイン王位についたブルボン朝の諸国王がとくにフランスからの輸入に対する制限措置を強化していったことから、「フランスの地位は一八世紀の間に初めはゆっくりと、ついで加速度的に傾いて行く[5]」と結論している。またセーは、一七一五―二六年の間フランス政府が王朝的個人的利害に動かされ、自国の経済的利害を軽視してイギリスと同盟しスペインと敵対したために、スペイン政府はフランス商人のカディスおよびアメリカとの貿易活動を妨害するにいたったと述べている。[6] 実際、セーの挙げる一七二八年のメモワール[7]においてフランスの貿易商たちは、アメリカ全域におけるイギリス、オランダ商人の密貿易や、オランダ、アイルランド、シュレージエンなどの麻織物のカディス市場への進出によって、フランスのスペイン領アメリカ貿易、とりわけフランス産麻織物の輸出が衰退をこうむったと主張している。たしかにフランスのスペイン向け輸出額は一七二四―二七年には落ち込みを示しているが、しかし一七二八年から四一年にかけては輸出はおおむね活況を呈しており、同じ時期のスペイン＝アメリカ貿易の曲線と比較してもフランスのシェアが低下したとは考えがたい。フランスのスペイン向け輸出はついで一七四二―四七年に急落したのち、四九―五〇年に急上昇して一八世紀の最大規模に達するが、この時期についてはフランスのカディス貿易の規模を示す統計資料が

表11　フランス船によるカディス港への輸入商品（1750―52年平均）

品目別	輸入額	
	千リーヴル	%
フランス産麻織物	13,067.7	(44.4)
毛織物	2,609.5	(8.9)
絹織物	3,534.4	(12.1)
小間物・金物	677.6	(2.3)
雑商品	2,443.4	(8.3)
フランス産品	98.5	(0.3)
西インド産品	228.4	(0.8)
外国産品	1,147.9	(3.9)
フランドル商品	2,939.3	(10.0)
外国商品	2,689.6	(9.1)
合計	29,436.4	(100.0)

（資料）Arch. Nat., F12 1834 A.

存在する。

表11は一七五〇―五二年の三年間にフランス船によってカディス港へもたらされた商品の内訳を示したものである。史料の出所[8]からみて数字はフランスの輸出港での価額と考えられるが、これによると麻織物が四四％と群を抜いて大きな割合を占め、絹織物と毛織物がこれにつづいている。この輸出統計の中には全体の二三％にのぼる外国商品・外国産品が含まれており、これをのぞいてフランス商品のみについてみれば麻織物の比重は五八％にまで上昇する。また、このカディスへもたらされた麻織物は同じ三年間のフランスからスペイン本国への麻織物輸出額（前掲表8参照）の八三％に相当することに注意しておこう。

つぎにこの一七五〇―五二年におけるフランスのカディス貿易の規模を、前述の一六八〇年代中頃の状態と比較するならば、カディス港へのフランス商品の輸入総額は九九〇万リーヴルから二二七〇万リーヴルへと二倍以上に増加しており、また基軸商品たる麻織物の輸入額も五八〇万リーヴルから一三〇〇万リーヴルに、繊維製品全体の輸入額も九二〇―四〇万リーヴルから一九二〇万リーヴルにといずれも二倍以上に増加している。もちろんこの両時期の比較のためにはその間の貨幣価値や商品価格の変動を考慮する必要があり、右のフランス麻織物の輸入量はその輸入額ほどには増加していないと思われるが[9]、いずれにしても一七五〇年代初めのフランスのカディス貿易の規模が一七世紀末に比べてはるかに拡大されていたことは確実であろう。

以上の事実からみて、カディス港のアメリカ向け輸出活動がめざましい拡大をとげた一七四〇年代末から五〇年代半ばにいたる時期には、フランス商品、とりわけ麻織物のカディス向け輸出も並行して著しい増加を示したと考えることができよう。この時期のスペイン＝アメリカ貿易に占めるフランスの相対的地位を直接把握することは不可能であるが、少なくともそれが一七世紀末に比べて低下したと考えるべき根拠は存在しないように思われる。ここで間接的ながら右の点の有力な傍証になると思われる一つの事実を紹介しておきたい。

前述のゴンサレスの研究によれば、カディス在住の各国商人が貿易活動によって獲得しうる年間の利益の推定額は、一八世紀中葉において表12のようであった。みられるように、フランス商人は一七五三—五四年において推定利益総額の四六%、一七六二年にも四二%を占め、その比重は各国商人の中で段違いに大きい。外国商人の中でフランス商人に次ぐのはイギリス商人とイタリア商人であるが、その比重は一五%あるいは一〇%程度にとどまっており、フランス商人にははるかに及ばない。フランス商人は人数の点でも外国商人中第一位を占めていたが[10]、彼らは一人当りの平均利益額においてもイギリス、イタリアの商人をはるかに凌駕していたのである。これに対して数的にははるかに優勢なスペイン商人は、一人当りの利益額がきわめて小さく、全体で推定利益総額の二〇%以下しか占めていない。ゴンサレスはこれらの事実から、「スペイン植民地貿易の唯一の受益者が逆説的なことに、この貿易から締め出された人々、それに従事する法的資格を欠く人々、すなわち外国人であったことは明白なように思われる[11]」と結論しているが、ここでの議論にとって重要なのは、それら外国商人の中でフランス商人が圧倒的優位を占めていた事実である。

表12　カディス在各国商人の年間利益推定額

	1753—54年	1762年
	ペソ　%	ペソ　%
スペイン	270,724 (17.5)	203,104 (18.3)
フランス	710,450 (46.0)	472,200 (42.4)
イタリア	149,800 (9.7)	120,050 (10.8)
ドイツ	31,000 (2.0)	28,500 (2.6)
デンマーク，スウェーデン，プロイセン	75,500 (4.9)	65,000 (5.8)
イギリス	231,000 (15.0)	173,750 (15.6)
アイルランド		
フランドル	74,700 (4.8)	49,750 (4.5)
合計	1,543,174 (100.0)	1,112,354 (100.0)

(資料)　González, *Cádiz*, t. I, p. 493.

さて、一七六三年以降スペイン＝アメリカ貿易に占めるフランスの地位が多かれ少なかれ低下をみたことは、前述のところからみてほぼ確実と思われる。この貿易分野でのフランスの後退は一七七〇年代までは、スペイン向け繊維製品の輸出、とりわけアメリカ向け輸出の基軸をなす麻織物の輸出が少なくとも五〇年代の好況時に近い水準を保っていたために比較的ゆるやかであったが、七〇年代末以降スペイン向け繊維製品輸出の衰退とともに急速化するにいたったとみることができよう。ところで、このようなスペイン向け繊維製品輸出の伸び悩みおよび衰退の原因としては、諸外国の安価な繊

物との競争の激化およびこれと関連するフランスの輸出品の品質低下がしばしば指摘されるが、[12] とくに七〇年代末から八〇年代にかけての輸出の急減少に対しては、スペイン国王カルロス三世による自国産業保護のための輸入制限政策の影響が決定的であったように思われる。カルロス三世はまず一七七八年の王令によって綿織物・靴下・帽子などを含む多数の商品のスペイン領アメリカへの輸入禁止を宣言したのち、[13] 翌七九年には、一七世紀後半以来諸外国の麻織物・毛織物等に与えられてきた特恵関税措置、Convenio d'Eminente および Gracia del pie de fardo をフランス産品については廃止し、[14] さらに八二年には新しい関税法によって、麻織物・絹織物・リボン・帽子などの輸入税を大幅に引上げるとともに、多数の製造品のスペインへの輸入を禁止したのである。[15]

この特恵措置の廃止と関税引上げの結果、フランスの絹織物は従価三〇—五〇％の関税を、同じく毛織物はイギリス製品の二倍に当る一〇—一五％の関税を、また麻織物はドイツ製品の二倍に当る二〇—二五％の関税を、それぞれスペイン本国への輸入にさいして支払わねばならなくなったといわれる。[16] こうして今やフランスの繊維製品は、スペイン市場における他国の繊維製品との競争において著しく不利な条件下におかれるにいたり、その輸出のドラスティックな減少をこうむることとなった(前掲表8・9参照)。筆者はこの八〇年代における輸出の急減少ののちに、フランスの繊維製品がカディス市場においていかなる地位を占めていたかを明確にできないが、一七九一年の時点でのスペイン本国に対する各国の輸入額については表13のような数字が得られる。これによると、フランスはスペインへの毛織物の輸入額においてイギリスに遠く及ばないだけでなく、麻織物の輸入額においてもドイツ（フランドルを含む）に追いぬかれるにいたっている。フランスは絹織物をも含めた繊維製品全体の輸入額の点ではいぜん各国中第一位を占めているものの、スペイン市場におけるフランス商品

表13　スペイン本国への各国の輸入額（1791年　単位：100万レアル）

	毛織物	絹織物	麻・綿織物	輸入総額
フランス	23	24	79	163
イギリス	69		12	137
ドイツ			82	101
オランダ	0.5		12	60

空欄は不明。
（資料）F. Dornic, *L'industrie textile dans le Maine et ses débouchés internationaux (1650-1815)*, 1955, pp. 235-236.

のシェアが一七世紀末～一八世紀中葉に比べて大きく低下したことは、疑いをいれないであろう。[17]

① これらの他、帽子・靴下・小間物・金物・サフラン（薬種）などが輸入されている。Patoulet, Mémoire, fol. 197-207.

② Idem.

③ Ibid., fol. 208.

④ Ibid., fol. 219-221.

⑤ Rambert, op. cit., p. 270.

⑥ Sée, Esquisse, p. 17.

⑦ H. Sée et L. Vignols, Mémoires sur le commerce, rédigés en vue du Congrès de Soisson, *Comité des travaux historiques, Section d'histoire mod. et contemp.*, fas. 12, 1926. しかし、これらのメモワールの一つは、スペイン政府による錦織・飾り紐の輸入禁止にもかかわらず、フランスがルーアンとブルターニュの麻織物を主体に、カディスからのアメリカ向け輸出品を最も多く供給していると指摘している。Ibid., p. 8.

⑧ 本史料は Bureau de la Balance du Commerce の貿易統計の中に見出されるが（Arch. Nat., F12 1834A）、この統計に記された各商品の輸出・入額は該商品のフランス国内価格にもとづき算出されたものである。

⑨ 麻織物をはじめスペイン向け輸出商品の価格がこの間に上昇をとげたことは、従来の物価変動史研究の諸成果にてらしてみても確実と思われるが、その上昇の度合を明確にすることは目下のところ不可能である。

⑩ 一七六二年にカディス在住の外国商人一五三人のうち、フランス人は六〇人にのぼり、以下イタリア人三五人、イギリス・アイルランド人三〇人、フランドル人一四人の順であった。González, *Cádiz*, t. I, p. 492.

⑪ *Ibid.*, p. 496.

⑫ Cf. F. Bourdais et R. Durand, L'industrie et le commerce de la toile en Bretagne au XVIIIe siècle, *Bulletin du comité des travaux historiques*, fasc. VII, 1922, p. 44; Tanguy, op. cit., pp. 121-122.

⑬ Rambert, op. cit., p. 284.

⑭ Idem. これらの特恵措置はいずれも、一七世紀後半にアンダルシーア諸港関税徴収請負人の地位にあったエミネンテが外国商人に対して認めたものである。まず一六六八年の "Gracia del pie de fardo" は外国からの輸入商品に関税を課するさい、輸入量の一定割合を課税対象から控除するもので、たとえば麻織物と毛織物は実際の輸入量の六〇%、絹織物の場合は四〇%に対してしか課税されなかった。つぎに "Convenio d'Eminente" はエミネンテが各国商人と個別的に締結した特定商品の関税引下げ協定で、フランスとの協定は一六七九年に結ばれ、麻織物・ビーバーの帽子・南仏ルエイ産のレースの輸入について特恵税率を定めている。Girard, *La rivalité*, pp. 59-70. この協定のおかげでフランスの麻織物は従来約五%という、シュレージェンの麻織物の二分の一の輸入税しか支払っていなかったという。Cf. Tanguy, op. cit., p. 122.

⑮ Idem.; Rambert, op. cit., p. 284. 輸入禁止品目の中には毛・麻・綿の靴下、絹と麻のレースのほか、婦人帽・ハンカチ・毛布・下着などが含まれていた。

⑯ Rambert, op. cit., p. 285; Tanguy, op. cit., p. 122.

⑰ 表13の資料は "Correo mercantil de España et sus Indias" 紙

上に発表されたスペイン政府の調査結果にもとづいているが、J・O・マクラクランの引用する Canga Arguelles の統計によれば、一八世紀末（年代不詳）にフランスはスペイン本国への輸入額においてドイツ、イギリスに凌駕されている。McLachlan, *Trade and Peace with Old Spain, 1664-1750*, 1940, pp. 16-17.

おわりに

以上において筆者は、一六八〇年代半ばから一七九〇年頃にいたる約一世紀間に、スペイン本国とそのアメリカ植民地との間の貿易に占めるフランスの地位がどのように変化していったかを考察した。その結果、フランスは一七五〇年代半ばまではこの貿易分野において圧倒的優位を占めていたが、一七六三年以降次第に後退を示しはじめ、とくに一七七〇年代末から八〇年代にかけて急激にその地位を低下させるにいたった、という一応の見通しをうることができた。

最後に、一八世紀のスペイン領アメリカ貿易に関連して、本稿で論じることのできなかった二つの問題点に簡単にふれておきたい。

その第一は、このようにスペイン＝アメリカ貿易における地位を低下させたフランスに代って、一八世紀後半にこの分野での比重を増大させた国はどこであったか、という点である。ここで問題となると思われるのはイギリス、ドイツ（フランドルを含む）、スペイン本国の三つであるが、このうちイギリスについては一八世紀におけるその対スペイン貿易の変動が統計的に明らかにされている。[1] それによれば、イギリスのスペイン本国向け輸出額は、一七五〇年代後半にピークに達したのち、一七六〇年以降、とりわけ一七七六年から世紀末にかけて明確に下降線をたどっており、したがってアメリカ向け輸出に占めるフランスのシェアが低下したこの時期にイギリスのシェアが増大したとみることは困難なように思われる。ドイツについては詳細を知りえないが、麻織物を主体とするそのスペイン向け輸出は一八世紀後半に著しい伸びを示しており、[2] アメリカ向け輸出に占めるドイツ商品の比重の増大は疑いをいれない。しかし一層重要なことは、同じ時

期にスペイン本国産品の輸出がめざましく増加したことであろう。このことはスペイン本国産業、とりわけ繊維工業の発展を反映しているが、一七八四—八五年にはスペイン商品がスペインからアメリカへ送られる商品総額の四四%を占めるようになったと評価されている。[3]

つぎに第二の問題点は、冒頭に述べたヨーロッパ諸国とスペイン領アメリカとの間の直接貿易に関するものである。ゴンサレスによれば、この直接密貿易はほぼ一六三〇年頃からスペイン本国を起点とする正規の植民地貿易の重大な競争者となり、一八世紀初頭のスペイン継承戦争の間にその黄金時代を迎えたといわれるが、[4]その展開規模を数量的に把握することは現在のところ全く不可能である。しかし従来の諸研究によれば、イギリス商人によるスペイン領アメリカへの直接貿易がユトレヒトの講和（一七一三年）ののちに一層の発展をとげたとみられるのに対して、[5]フランス商人は一七世紀末から一七二〇年頃までチリ、ペルーの沿岸への「南海貿易」を活発に展開したのち、アメリカへの直接貿易を急速に縮小するにいたったようにみえる。[6]それゆえ、一八世紀の大部分の時期において、スペイン領アメリカへの直接貿易に占めるフランスの地位がイギリスのそれにはるかに及ばなかったことは明らかであり、フランスのスペイン領アメリカ貿易は基本的にカディス経由で行われたとみてよいであろう。[7]

① McLachlan, *op. cit.*, p. xvii; E. B. Schumpeter, *English Overseas Trade Statistics 1697–1808*, 1960, p. 17.

② 前掲表13および前節の注⑰を参照。さらに P. Léon, éd., *Histoire écon. et soc. du monde*, t. III, p. 111 においてP・ビィテルがドイツ産麻織物の南欧向け輸出増加を強調している。

③ M. Devèze, *L'Europe et le monde à la fin du XVIIIe siècle*, 1970, pp. 429–430. もちろんこの中には食料など農産物も含まれている。またゴンサレスの分析結果によってみても、スペイン産品は繊維製品を中心として、一七九一—九二年にカディス港のアメリカ向け輸出総額の四〇%強を占めており、一七九五年に至ってはじめて外国産品の輸出額を凌駕する。Gonzáiez, *Comercio*, pp. 57, 256.

④ do., *Cádiz*, t. I, pp. 109–110, 121; Chaunu, *op. cit.*, t. VIII-1, p. 227.

⑤ McLachlan, *op. cit.*, pp. 25–28; Léon, éd., *op. cit.*, t. III, p. 70.

⑥ フランスの「南海貿易」は一八世紀半ばまでに完全に消滅したという。Rambert, op. cit., p. 279; Sée, Esquisse, p. 21; L. Vignols et H. Sée, La fin du commerce interlope dans l'Amérique espagnole, *Rev. his. écon. et soc.*, t. XVIII, 1925, p. 303. ただし、

フランス領西インド諸島を中継地とするスペイン領アメリカへの密貿易は、一八世紀後半にむしろ拡大したようにみえる。この点については Cf. J. Tarrade, *Le commerce colonial de la France à la fin de l'Ancien Régime*, 2 vol., 1972, t. I, pp. 94–95, t. II, pp. 694–695.

⑦ Vignols et Sée, La fin du commerce, p. 303 ; Savelle, *op. cit.*, p. 82.

（京都大学文学部助教授　　）

Le commerce hispano-américain et la France au XVIIIe siècle

par

Haruhiko Hattori

Il est certain que, dans la seconde moitié du XVIIe siècle, la France tenait parmi les puissances européennes le premier rang dans les exportations industrielles vers l'Amérique espagnole via Cadix. Quelle sera la part de la France dans ce domaine au cours du siècle suivant? C'est le problème que j'ai essayé d'élucider dans cet article.

En comparant pour le XVIIIe siècle le mouvement du commerce hispano-américain avec celui du commerce franco-espagnol, j'ai pu constater, d'une part la croissance presque séculaire des exportations de l'Espagne vers ses colonies d'Amérique, et d'autre part la croissance parallèle jusqu'en 1749-1756, puis le recul ou la décroissance après cette période, des exportations françaises vers l'Espagne, composées en majeure partie des produits textiles dont la presque moitié était normalement destinée à l'Amérique espagnole. De ces faits on pourrait conclure que la France, après avoir conservé jusqu'en 1749-1756 sa prépondérance dans le commerce hispano-américain, a vu sa position décliner, lentement d'abord, puis, après la fin des années 1770, à un rythme accéléré.

Social Change in the *Chin-Sung* 晋宋 Period and the *Chiang-nan* 江南 Rural Society

by

Kensuke Yoshimori

The *Chin-Sung* Revolution is a dynastic one which happened at the zenith of aristocratic society and brought about the change of regime from *Eastern Chin* 東晋 to *Sung* 宋. Up to the present it has been examined only from the side of the aristocracy and the state, and the movement of the rural community has been treated lightly. But the rural community played an essential part in the social change.